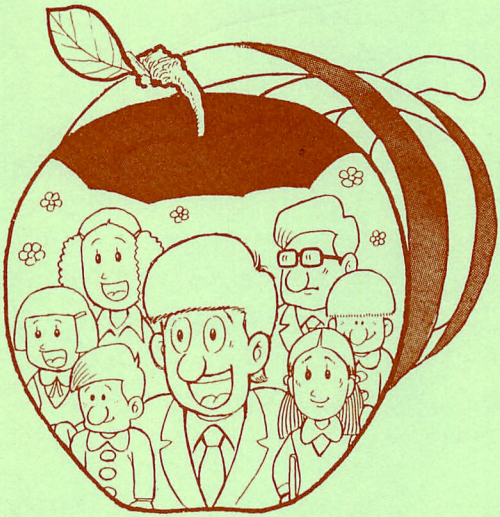
どもりの相談



巻　頭　言

恐怖・羞恥・無知、私たちはこれまでこの３匹の悪魔にとりつかれてきました。その中でも、無知という悪魔は最も手ごわく、そのためにどもりは、わけのわからないのろいのように思われてきたのです。

このパンフレットは、３匹の悪魔すべてと戦うために編まれました。特に、無知という悪魔と戦うために、吃音者自身にも、また吃音児・者のまわりの多くの人々にも、どもりの本当の問題は何かを知らせています。

私たちは、吃りながらも実りある人生を送ってきた多くの先輩たちに学び、吃ることによっておこる恐怖から逃げたり隠れたりせず、どんどん話していかなければなりません。そうすることが、どもりのことをあまり知らない人々が作りあげたどもりに対する悪いイメージを変えていくことにもなるのです。

吃ることはそれ自体、少しも恥ずかしいことでもなく恐れるものでもありません。ただ吃音者が吃らないようふるまおうとすることに問題があるのです。吃ることを恐れ、恥ずかしがり、吃っていたら自分のやりたいことが何もできないと思いつめることにこそ問題があるのです。

どもりにとらわれたあまり犯してきた私たちの失敗を、どもりの子どもたちが繰り返さないように、また私たち成人吃音者の仲間が自分を無価値な人間であると思いこんで卑下することのないように、私たちは私たち自身を変えていかねばなりません。また、社会を啓蒙していかねばなりません。

吃るからといってそれにとらわれ、自分の人生を台なしにするのではなく、輝きあるすばらしい人生を共に送っていきましょう。

ウエスタンミシガン大学教授（言語病理学）
チャールズ・ヴァン・ライパー

はじめに

「どもり」のパンフレットをできるだけ大勢の人々に読んでいただこうという企画は、言友会のメンバーを中心にして大分以前から考えられていましたが、このたび一冊の小冊子として完成されました。私も、このグループの輪の中で、いささかなりとも協力できたことを喜んでいます。この小冊子は、皆で何回となく検討しては書き直し、また考えるといった協同作業のあげくでき上がったものです。必要な要点を、限られた紙量の中にどうしたらもりこめるか、迷い悩んだ足跡がしのばれます。その成果はと問われれば、必ずしも充分なものとはいえないかもしれません。しかし、このパンフレットの特徴の１つは、過去20数年、あるいは30数年、いやもっと長い間、どもりのために苦悩してきた吃音者自身の手によって作られたという、この点にありましょう。そこには真実の訴えがあるはずです。第２の特徴は、特定の吃音者のみによってではなく、吃音者をはじめ、吃音児を持つ母親、吃音児を学級に持つ一般学級担任教師、ことばの教室担任、吃音を研究する者、その他吃音問題に関心をもつ一般者など、大勢の人々の協力と話し合いを重ねて作られたという点です。「どもり」に苦しむ吃音児・者、その両親はもちろんですが、もっと広く、どもりを知らなかった人々にも知っていただかねばと考えたためです。

どもりの子どもを持つ母親へ、どもりの子どもを持つ一般学級担任教師へ、そして成人吃音者へと、三者に対する吃音者からの返信という形式で、このパンフレットは書かれていますが、その中心は、具体的吃音対策法というよりも、具体的な吃音問題の背後にある吃音者の生き方―それは人間の生き方にほかならない ― に向けられています。

どもりの問題は深く大きいと思います。どもりを知らない人々にとって無関心であり、もともと無縁のこの問題が、このパンフレットを通じてその輪をさらに拡げて行ってほしいものです。そしてその輪の中へ多くの人々が加わって行ってほしいものです。

この小冊子を読まれた大勢の人々から、遠慮のないご批判と、心からなるご叱声を期待しています。それこそがさらに望ましい第２のパンフレットとしてよみがえることになるからです。

筑波大学教授
内須川　　洸

お母さんへ

お手紙ありがとうございました。

お子さんが吃(ども)るということで大変ご心配なお母さんのお気持ちよく分かります。私たちの母親もこのように悩んでいたのかと思うと、親のありがたさを痛いほど感じます。

3才の頃、K君が吃るのに気づき、5才頃からますますひどくなって、いろいろな機関を訪れ、相談にのってもらっても、どもりは治らず悩みは深まる一方だというお手紙を拝見しました。そこで、長い間吃ることで苦しんだ私たちの体験や専門家から学んだ知識などを中心にご返事させていただきます。

どうして吃るように なったのでしょう

この質問は、お母さんからだけでなく、成人吃音者（大人のどもり）からもよく受けます。

お母さん、K君が吃るようになった原因で何か思い当たることはありますか？

これまでのどもりの研究では、原因を究明することが主要なテーマでした。アメリカなどの学者を中心に、いくつかの重要な研究がなされ、論議されましたが、確かにこれだと明言できる原因が分からないのが現実なのです。

原因が分からないと言われながら「どもりは母親が作る」とも言われます。

「子どもさんが何か悪いことをしたと言ってはきつくしかったことはありませんか」「ことばがつっかえたとき言い直しをさせたことはありませんか」などと質問され、日常生活のいろいろな場面についてそのほとんどが自分に当てはまるようでつらい思いをし、その上、「そのお母さんの態度がお子さんをどもりにしたのですよ」と言われたときには、頭を石でなぐられたようなショックを受けたそうですね。

その後どこへ行っても大体同じようなことを言われ、これまでの自分を反省し、子どものどもりが治ってくれるのならと態度を変えようと努力したけれど、一向にどもりは治らなかったのですね。同じ頃相談に行った他のお子さんがすっかり吃らなくなったのを見るにつけ、なぜうちの子だけがと情けなくなるというお気持ちよく分かります。

ジョンソンの診断起因説

ここで「どもりはお母さんが作る」ということについて少しお話してみましょう。

アメリカの言語病理学者で、その研究成果

が世界的に認められているウェンデル・ジョンソン博士を中心に、心理学・医学・教育学などの分野の専門家が1934年から1959年にかけて大がかりな調査を行いました。

その研究は、子どもをどもりと考えている母親とその子どもの群A、そうでない母親とその子どもの群Bが、果たしてどこがどう違うのかを調べたものです。子どもには心理テストや医学的な検査などによって心と体の働きやことばの状態、一方、母親には性格テストや子どもの話しことばに対する意識や態度などが調べられました。

子どもの場合

- ○　ことばのつっかえる量やつっかえ方にはほとんど差がない。
- ○　性格的、身体的な差は全くない。

母親の場合

- ○　A群の母親はB群の母親に比べ、子どもの発達や行動、特にことばの面での期待が少し高い。
- ○　子どものどもりを気にし始めるのは3才前後が多く、それを最初に発見するのは、ほとんどの場合母親である。

以上のような結果から、ジョンソンは次のように説明しました。

『どもりの子どもは、心も体も異常はない。3才の頃独特のあまりなめらかでない話し方に対して、A群の母親はそれを吃ると考えるのに反し、B群の母親はごく普通の話し方と考えている。この普通の話し方に対して“どもり”だとレッテルをはるのがどもりの子のお母さんなのだ。つまり“どもり”と診断された後からどもりが起こる』

これがいわゆる「母親の評価がどもりを作る」という説の根拠であり、ジョンソンの診断起因説なのです。数あるどもりの原因を説明する説の中で、現在も大きな影響を与え続けているもののひとつと言えましょう。

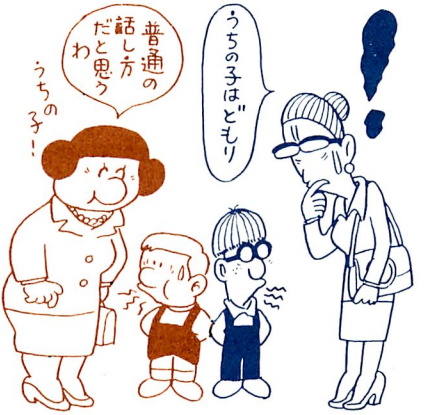
ジョンソンのアドバイスの功罪

ジョンソンはこの説をもとにして、次のようなアドバイスをしています。

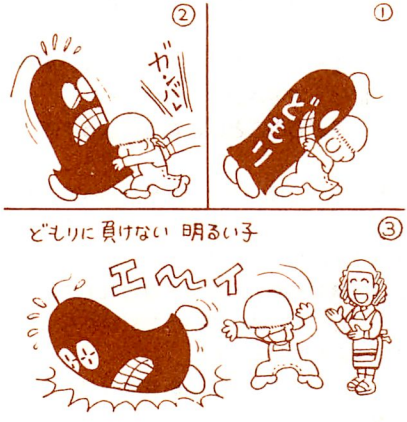
- ○　自分のことばの異常を気にするよう、注意を向けさせてはいけません。そのために“どもり”というレッテルをはったり、「言い直してごらん」「もっとゆっくり言ってごらん」などと言ってはいけません。
- ○　喜んで話したくなるようなよい聞き手になって下さい。
- ○　子どものことばに寛大になって下さい。

どのように接してよいか分からなかったお母さんに、これらのアドバイスは大きな勇気を与えました。そして、それによって、吃るたびに嫌な顔をされたり注意されてきた子どものどもりが、消えていったり軽くなったりする場合もありました。

しかし、この説がよい影響ばかり与えたとは限りません。



お母さんのように頭からこれまでの育児態度を責められて自分がこの子の“どもり”を作ったのだと自責の念にかられ、育児に自信をなくし、ノイローゼ気味になった人、自分が悪かったのだからと当然しつけなければならないこともついつい甘やかしてしまい、一人では何もできないようにさせてしまった人もいたからです。



「どもりを作るのはお母さんだ」とは言えない場合は多いものです。

4才頃、急にひどく吃り出し、その吃り方も最初から力みがあり、吃らないでおこうと手を振ったり、顔をしかめたりする、それ以前にはごく普通に話しており、「言い直しをしなさい」などと言ったことがないケースです。また、18才になった子どもから、どもりの矯正所に行きたいと言われ、初めて自分の子どもが吃っていたことを知ったケースもあります。このように、お母さんがどもりだと診断していない例は少なくないのです。

お母さんもどうか“私が悪い”とあまりご自分を責めないで下さい。たとえ、お母さんに反省することがあったとしても、お母さんはお母さんなりに子どもの幸せを願って努力されてこられたのですから。いたずらに過去を振り返るより、過去は過去としてこれからこの子どもとどうかかわるかを考えて下さい。

どもりは治るのでしょうか

かわいいK君の寝顔を見ていると、つい涙を浮かべてしまうというお母さん。お母さんがK君のどもりをなんとか治したいと願うお気持ちは、私たちにはよく分かります。長い間どもりで悩んだ私たちも、いつかパッとどもりが消えてなくなることを何度夢みたかしれません。

子どものどもりが大人のそれと比べて、自然に消えていく割合が高いことは事実です。しかし、ジョンソンのアドバイス通りにしても、また別の治療法を使っても、K君のように治らなかったり、更には私たちのように大人になってもまだ吃り続けることもあるのです。そして、やっかいなことに、どの子どもが将来も吃り続け、どの子どもが治っていくのかを、子どもの頃に見きわめることは非常に難しいのです。

そのような現状の中では、“どもりは必ず治る”と断定するのでなく、治らない場合もありうると考え、たとえ治らなくてもどもりに負けない明るく元気な子どもに育てることを心がけることが賢明なお母さんと言えます。

ある母親の体験

ここである母親の体験をご紹介しましょう。

子どもが3才半の時、Mさんはどもりに気づいて、「吃ってもたくさん話すようにすること」「どもりに対する心配を捨て、明るい気持ちで子どもの話を聞くこと」「干渉を少なくし、しかり方を工夫すること」などの専門家のアドバイスを一生懸命実行してきました。そうすることが、子どものどもりを治す

ことにつながるのだと信じていたためです。

しかし、その後、言語障害の専門コースのある大学で、どもりについて学ぶうちに、どもりは世間一般に考えられるようには、簡単に治らないことを知りました。また多くの成人吃音者と会う機会を得て、Mさんの考えも少しずつ変わってきました。

『“どもりは治らなかったけれど、これまでの苦しみが大いにプラスになっている”という成人吃音者のことばは、彼らの明るさと相まって、どもりは治さなければいけないものだと思っていた私に、それまでのあり方を反省する機会を与えてくれました。そして、これまで必死の思いでやってきた私の子どもへの接し方は果たして正しかったのだろうかという疑問がわいてきました。しかり方の工夫というひとつをとってみても、母親が子どもに接する場合、“どもりを治すために”というのと、私が会った人々のように、つまり“明るくたくましく生きる吃音者に育って欲しい”というのとではかなり違ってくると思い始めたのです。私自身、過保護だなあと思いつつもどもりが治るためならと目をつむってきたことがありました。それが子どもをダメにするのだということに気づかずに』

Mさんは、自分が子どもにとった態度を、どもりを治そうとしていた過去とそうでない現在とに分けて次のようにまとめています。

私と子どもとのつき合い　― 過去と現在 ―

	どもりを治そうとする場合（過去）	どもりに負けない明るい子どもに育てようとする場合　（現在）
子どもが吃った時にとろうとする母親の態度	『言い直しをさせない，干渉しない，どもりを受け入れる』ことに気負いがみられ，不自然だった。	『言い直しをさせない，干渉しない，どもりを受け入れる』ことが自然にできるようになった。
長所を伸ばそうとする態度	あせりぎみになりがちだった。	意気ごまず自然になった。
子どもの欠点に対する感じ方	ついついどもりと結びつけてしまいがちだった。	欠点は欠点としてとらえ，どもりと結びつけないようになった。
子どもの将来に対する不安	いつも，どもりのまま大人になったらどんな人生を送るだろうという不安を抱いていた。	誰もが，我が子に感じている不安と変わらなくなった。
吃っている子どもの状態に対する感じ方	どうしても気になって仕方がなかった。	あまり気にならなくなった。

前の表によれば、ジョンソンのアドバイスなどを基本にして、子どもが吃った時にとろうとする態度は両者とも同じですが、その仕方や母親の意識、どもりに対するとらえ方が随分違っていることにお気づきでしょう。

私たちはこの違いが大人になってからの生き方に少なからず影響を与えるのではないかと考えるのです。

これは、どもりの持つ本当の問題は何なのか、どこにあるのかということに関連してきますので、もう少し詳しくお話しましょう。

どもりから逃げる人と逃げない人

お母さんはK君の様子を見ていると、将来このままどもりが治らなかったら、学校へ行きたがらない消極的な子になり、また学校を卒業しても一人前の仕事につけるかしら、結婚はできるだろうかと、先の先を考えて不安になっておられるようですね。

確かに私たちの中には、どもりから逃げ回って悲観的になり、自分の殻の中に閉じこもる人がいます。

しかし、一方、どもりから決して逃げることなく、労働組合の責任者として、大勢の人の前で、何千人もの労働者の権利を守るために訴えている人や、吃りながらも友だちと意見を闘わせ楽しい学校生活を送っている高校生もいます。

吃っている人すべてがハンディキャップを負っているのではなく、吃りながらも明るく自分なりの人生を生きている人は、お母さんが考えておられる以上にたくさんいるのです。

同じどもりでありながら、どもりから逃げる人と逃げない人がいるわけです。

これは、どもりの重い軽いの違いにあるのではなく、その人の生きる姿勢そのものの違いにあると言えます。その生きる姿勢は、幼い頃から積み重ねられてできあがってくるものです。小さい頃、まわりの人が、どもりに対してどのように考えていたか、あるいはその子どもに対してどのような態度をとったかということが、当時その子どもに影響を与えたのは言うまでもなく、大人になってからの生きる姿勢にも少なからず影響を及ぼしているであろうことは想像できましょう。

つまり、前の表で示したように、吃った時にとる態度が同じであっても、どもりに対するとらえ方が違っていれば、日常の接し方は自ずと異なり、その積み重ねが、どもりから逃げる人と逃げない人の違いに影響を与えているのではないだろうかと考えるのです。

子どもを消極的な吃音者に育てる方法

「明るい子どもに育てるために ～ しましょう」とお話するより、まず、子どもを「暗い消極的な吃音者に育てる方法」をお話しましょう。その方が、私たちの体験を整理するのに便利ですし、また、お母さんもこれまでのあり方をふり返りやすいと思うからです。

(1)　子どもが吃るたびに悲しい嫌な顔をし「もっとゆっくり言ってごらん」「もう一度言いなさい」と注意しましょう。また時にはヒステリックにしかりましょう。

———子どもが吃ることに対して暗い嫌な感じを抱くのに役立ち、話すことが嫌いな子に育てられます。

(2)　どもりは悪いもの、劣ったもの、不快なものというどもりに対する悪いイメージを持って下さい。

———こんなにも悪いどもりは早く治さなければいけないと考え、治ると宣伝する情報にはとびついて下さい。「どもりは必ず治せる」と宣伝する所に出かけるのもいいでしょう。そうすれば親子ともども「どもりは悪いもの」という気持ちを更に強く持つことができましょう。

(3)　子どもの将来を案じ、大きな不安を持ち続けて下さい。

———どもりのために将来学校嫌いになるのじゃないか、友だちができないのじゃないか、就職は？　結婚は？　など次から次へと不安の輪を広げていって下さい。お母さんがそのような不安を持ち、それを信じて子どもに接すれば、そのお母さんの気持ちはやがて通じ、大体予想したことが実現するでしょう。

(4)　「どもりは必ず治る、治せる」とかたく信じて下さい。

———どもりは必ず治るのですから、決して子どもの吃っている状態を受け入れてはいけません。どもりさえ治れば勉強もできるようになり、いいつけもよく聞くいい子になると信じるのです。お母さん自身が子どものどもりを受け入れなければ、子ども自身もどもりを受け入れることはないでしょう。

(5)　ご両親自身が消極的な生活を続けて下さい。

———ご両親とも引っ込み思案で、何事にも消極的で生きがいのない、楽しくない生活を続けて下さい。ＰＴＡや町内会などで何か役を引き受けざるをえなくなっても、何かと口実を作って逃げて下さい。そのような生活を続ければ、逃げの人生の見本を身近に見る子どもは、将来消極的な人になってくれるでしょう。

お母さん、すでにお気づきでしょうが、以上述べてきたことの全く逆のことが、どもり

に負けない明るい子どもに育てる基本的な考えになります。

このことを頭に入れておいていただいて、更にどもりに負けない子に育てることを、日常の生活の中で、考えていきましょう。

どもりに負けない明るい子に育てるために

話すことが好きな子ども

どもりの子どもの中には、話すことで嫌な体験をしたり、心理的圧迫が加わったりして段々と人前で話さなくなる子もいますが、吃りながらも楽しそうにたくさん話す子もいます。この違いはどこからくるのでしょうか。

話すのは楽しいことだと子どもが思えるには、失敗したことでも何でも話せるリラックスした家庭の雰囲気と、お母さんを始めとする聞き手の態度が大きく影響します。お母さんが吃るという症状にとらわれないで話す内容をじっくり聞いて、上手に合いづちを打ったり質問するだけでも、子どもは楽しく話ができ、表現力がつき、話す量も増えましょう。

ここで幼稚園の遠足から帰った子どもとお母さんの会話を２つご紹介しましょう。

（例１）

子：お母さん、ただいま。
母：お帰りなさい。動物園楽しかった？
子：うん。きりんがいたよ。
母：そう。きりんがいたの。お首が長かったでしょう。
子：うん。木の葉っぱ食べてたよ。
母：へえー　きりんは葉っぱが好きなのね。きりんの子どもはいなかったの？
子：いたよ。小ちゃいきりん。
母：あらー　かわいかったでしょう。お母さんも見たいなあ。今度お父さんと三人で行きましょうか。
子：うわー　ほんと！　きっとだよ。お母さん。

（例２）

子：お母さん　ただいま。
母：お帰りなさい。動物園楽しかった？
子：うん。きりんがいたよ。
母：そう。きりんがいたの。手が汚ないでしょ。きれいに洗っておやつを食べなさい。

この２つの例を比較されてどうお感じになりましたか。

子どもの話を上手に誘導していくことは大切ですが、子どもの心の中にお母さんにぜひ伝えたいという新鮮な感動が育っているかどうかということも見逃すことはできません。感動する心を育てることは難しいことですが、お母さんが日頃、庭に花が咲いた時、空に虹を見つけた時、子どもを呼んで「ほら、見てごらん。きれいねえ」と一緒に眺めるだけでも、子どもの心の動きはかなり違ってくると思います。感動する心があれば、自然と感情豊かに表現できるようになります。

吃っていても、身ぶり手ぶり、顔に笑をたたえて話す成人吃音者がいますが、その人のどもりは少しも苦にならないと人は言います。その反対に、顔に表情もなくボソボソと話す吃音者は、よけいに吃っていることが目立つことがあります。

楽しそうに生き生きと話す子どもの姿を見ることはうれしいことです。お母さんもお子さんと話す時には、少しオーバーなくらいに感情を表現して、笑顔で楽しくお話してみて下さい。母親の表現力の豊かさは、子どもの感情の豊かさにつながっていくでしょう。

仲間と遊ぶ子ども

遊びは、十分に体を使ったり、自分の気持ちを素直に表現したり、いろいろなものを使いこなし工夫したりするのに役立ちます。また、思いきり遊んだ経験は、子どもに満足感を与え、自信をつけさせます。これらは日常の生活全般の中に生かされていくのです。

「遊ぶ子どもは伸びる」とよく言われるのも、遊びが子どもにとっていかに重要であるかを物語っています。

3才近くになると、一人で遊んだり、お母さんと遊んだりするだけでなく、仲間を求めるようになり、仲間と遊ぶことが増え始めます。

子どもはこの仲間との遊びの中で、自分を主張したり、がまんをしたり、またけんかをしたり、仲良くしたりしながら、人としてのつき合い方を身につけていくのです。一方、仲間と遊べない、遊ばない子は、それが身につかないだけでなく、性格的にもいろいろな問題が現われてきます。

仲間と遊ばない子どもにはいろいろなタイプがありますが、どもりの子どもの場合、仲間の中に出ていくのをしぶったり、嫌がる子どもが見られます。

どもりに負けない明るく元気な子どもに育てるためには、仲間と楽しく遊べるかどうかがきめてとなってくるのです。

大変重要な仲間との遊び

では、どうすれば、仲間と遊べる子どもに育つのか、それをお話しましょう。

それには、どうして仲間と遊ぶことにしりごみするのかを、子どもの生活の中でまずつかむことが必要です。

他の子どもと遊ぶ経験が少なかったので、遊び方が分からない。家庭での気ままな遊びに慣れているので、自分の思い通りにいかない仲間との遊びがにがてである。体が丈夫でなかったり、運動能力が不十分なため、遊び方が下手で仲間との遊びについていけない。「ことばがおかしい」と言われたことが気になっている。などいろいろなことが考えられましょう。

これら子どもの状態がつかめた上で、どうするのか考えるのです。お母さんとの遊びや一人遊びは大切ですが、その解決はそればかりでできるものではありません。仲間との遊びの中でこそ成しうるものなのです。

そのために子どもが仲間の中に出ていくよう積極的に励まし、その機会を作ることです。

遊園地や動物園などに行く時、近所の子どもを誘うのもよいでしょうし、家へ呼んで遊

ぶこともよいでしょう。最初の間はお母さんが、仲間との仲介役をすることも必要となります。また、子どもに体力をつけ、自信を持たせることも大切です。最近は、水泳・体操の幼児教室がさかんですし、町内会、子ども会では、海水浴・キャンプなどを企画している所も多いようです。それらを積極的に利用することです。また、家でお手伝いをさせたり、一緒に仕事をするのもいいでしょう。要するに、自信を高め、体をきたえ、仲間の中に出すことが大切なのです。そのような取り組みの中で仲間と遊ぶ子どもが育つでしょう。

子どもの状態がつかめず困った時には、児童相談所、ことばの教室などの機関をご利用下さい。そこでは、子どもを遊ばせる中で問題をつかみ、適切なアドバイスをしてくれるでしょう。

逃げない子ども

高校生になっても、自分の買い物が一人でできない人がいます。地方から都会の大学に入学した学生が帰省する際の切符が買えず、親が買って送っているという話も聞きました。

どもりに負けている成人吃音者の悪い生活態度のひとつに、どもりを口実に、しなければならないことから逃げてしまうということがあります。これは小さい頃から、自分のにがてとすることから逃げてきたこと、親がそのような時、代わりにしてくれて自分ではすることがなかったことなどの積み重ねが影響しているようです。

そのようにして育った人が大人になってから「どもりだからといって逃げていてはいけない。責任は果たしなさい」と言われても、その実行はなかなか難しいようです。

小さい頃から、どもりのために逃げないように育てるにはどうしたらよいのでしょう。

家庭の中で、家族のそれぞれが役割を持っていたら、つまり子どもは子どもなりに仕事の分担があり、それは当然しなければならないものとされていたらどうでしょう。家族のみんなが、それぞれ責任を持ってそれらを成し遂げていたら、たとえにがてと思っているおつかいなども　「僕、吃るから嫌だ」とは言えないでしょう。

とは言え、実際には、おつかいに行って吃ったために笑われたり、何も買わずに帰ってきたりすることもあるでしょう。そんな時、お母さんは、その時の様子をよく聞いてあげ今度はどうしたらよいのか一緒に考えて下さい。紙に書いていってそれを読んでもいいでしょう。「あれ、ちょうだい」と指さしするのもいいでしょう。お兄ちゃんにつき合ってもらうのもいいでしょう。とにかく、吃りながらもおつかいを済ませて帰ってくる子どもに育てていただきたいと思います。1回や2回の失敗でかわいそうだとおつかいをやめさせないで、長い目で子どもの将来をみつめて下さい。

おつかいだけに限りません。家庭にはたくさんの仕事があります。最初はやさしいことから段々と難しいことへ、子どもに合わせて

無理なく、仕事をさせるようにして下さい。そして、できた仕事は、結果を見るのでなく仕事の過程の中での努力や工夫に目を向け、ことばだけでなく、笑顔で頭をなでたりしながらほめてあげましょう。

お母さんから指示された仕事をやりとげ、心からほめてもらえると、子どもは満足感や成功感を味わうことができます。そこから、自信が生まれ、意欲が育ちます。この自信や意欲が、たとえ吃っても逃げずに仕事をやりとげようとする姿勢を作っていくのです。

お わ り に

大変長くなりましたが、どもりに負けない明るい子を育てることを基本にすえて、このように育てていただきたいと、お話してきました。

もうお母さんはお気づきでしょうが、これまでお話してきたことは、子どもが吃る、吃らないにかかわらず、すべての子どもを育てるための基本とも言えます。これらのことは、お母さんもよくご存知で、そうありたいと願ってこられたに違いありません。

にもかかわらず、どもりについてご存知なかったために、不必要にどもりにとらわれてしまい、子どもの幸せを願ってされてきたことが、裏目に出てしまったこともあったでしょう。時には過保護になってしまったり、またきびしすぎたりしたこともあったでしょう。

これまでお話してきたことを、1つの知識として、あとはお母さんが、どうあることが子どもの幸せにつながるか、よくお考えいただき、お母さんの信念にもとづいて子どもを育てていって下さい。

いろいろと注文も多く大変だと思われたかもしれません。頭で理解できても実際に行動するとなると大変だと思います。一度に全部できなくても、ひとつずつできるところから行動に移してみて下さい。あせらず、自分のペースでがんばって下さい。

最後に、1つお願いがあります。子どもが大きくなって、もしどもりで悩むことがあれば、その時は良き相談相手になってあげて下さい。私たちは母親にすらどもりの悩みを話せず、1人で悩んでいました。悩みごとを話し合える親子のパイプを今からつけておいていただきたいのです。

相談をうけた時は、どもりは治らないかもしれないこと、それでも吃りながらも明るく生きられることを、具体的に例をあげて話してあげて下さい。できれば、吃りながらも明るく生きる成人吃音者に会わせるのもいいでしょう。その時は、私たちにご連絡下さい。

困ったことがありましたら、またおたより下さい。一緒に考えていきましょう。

普通学級の先生からの手紙

N君が3年生の時、私が担任になりました。その時はなんとものを言わない子だろうと思いました。消極的で指名しても立っているだけです。友だちもなく、いつもひとりでいる子でした。このままではいけないと思い、私の方から意図的に指名するようにしましたが反応しません。できるだけ話をさせようとしたことが、かえってあの子の負担になったのか、私の顔色をうかがうようになってしまいました。そんな様子をお母さんに話しましたら、「実は、吃りますのや」と言われたのです。

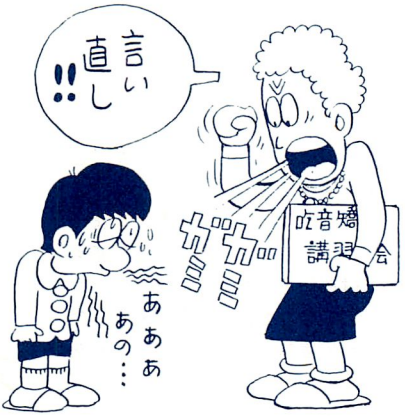
私は驚いて、N君の2年生の時の担任にそのことを聞きますと、担任もN君のどもりに全く気づかなかったとのことでした。

4年生になり、できるだけ発表の機会を多くするために朝、班日誌を順番に発表させました。しかし、彼の場合、話すのに暇がかかるため、ひどい時には、「N君、はよ言え」とクラスの子どもたちが催足するようなこともありました。すると、ますます困惑し、話ができない状態になりました。

こんな時に民間の夏期吃音矯正講習会がO市であることを知り、保健の先生を通して親に連絡したところ早速行かれました。しかしその3日間の講習は、よい結果をもたらしませんでした。

お母さんはその時の様子を、次のように言っています。

『本人が小さい時は、そのうちに治ると思っていたこともあって、そんなにきつく注意した覚えはないのですが、昨年の夏、学校から勧められて、O市で行われた講習会に行ってからは、それはもうきつう注意しました。講習会の先生から、どもりを治すのは、努力と注意やと言われましたので、「また!! 言い直し!! また!!」とそれは口やかましく言ってきたのです。そしたら、ものを言わん子になってしまいました。それ以後は、なんか暗い陰気な子になってしまいました。』



担任の私がなんとかしなければと思うように……後略

普通学級の先生へ ことばの教室より

お手紙ありがとうございました。

日常の学校生活の中で、N君と接しておられる先生が、N君がどもりだと気づいて以来N君の将来のことを考えて、何とかしてあげたいと私の学級（ことばの教室）にご連絡下さったことありがたく思います。

しかし、N君の問題をどう考え、今後どのように指導していくかは、ことばの教室担任の私だけで考えては片手落ちでしょう。というのは、学級担任である先生とN君の学校生活について幅広くご相談してこそ、より適切な対策が得られるからです。

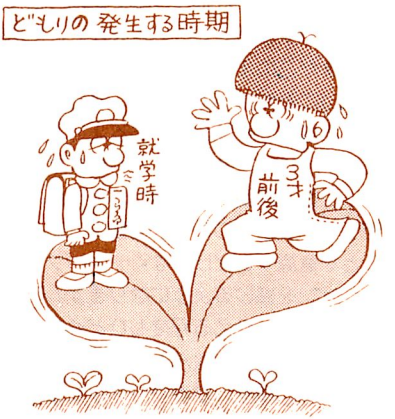
それでは、これからN君のことを整理し、対策を考えながら、一般に学童期のどもりの問題をどうとらえ、どう取り組めばよいか考えてみましょう。

学童期のどもりの特徴

N君の問題を考えるにあたって、一般に学童期のどもりはどのような特徴を持っているかを、まずお話しましょう。

どもりは多くの場合、3才前後に発生します。ちょうど子どもがことばを獲得し、自由に操ろうとし始める時期です。次に多いのが就学の時期です。保育所や幼稚園で集団の生活に慣れているとは言え、子どもにとって小学校という新しい世界に入ることは、大きな期待と共に、また不安や緊張を伴います。小学校に入る頃から吃り始めたという子どもが少なくないのもそのためでしょう。

また、3才頃から吃っていた子どもも、この不安や緊張と集団生活のストレスの中で、吃り方やどもりに対する反応の仕方が変化していく場合があります。



この時期のどもりの大きな特徴は、次の2点です。

① どもりが進展する時期である
② ひとりひとりの問題が、かなり違っている

どもりの進展

アメリカの著名な言語病理学者、チャールズ・ヴァン・ライパーは、どもりの進展の状態を大きく4段階に分けて、次のように説明しました。

○ 第1段階（1次性のどもり）

始まってまもない吃り方は、例えば「ボボボクネ」「ボークネ」というように、ほとんど力まない吃り方です。この段階では、子ど

も自身、自分のことばがこのようになっていることに気がついていないようです。話すことに対する恐れや、フラストレーションを感じている様子も見られません。

○　第２段階（移行期のどもり）

音の繰り返しや引き延ばし方が段々変わってきます。「ボ…ボボ…クネ」といったような言い方で少し力みがでてきます。この段階でも、まだこのような自分のことばに気づいていないことが多いのですが、時には「ボクうまくお話ができない時があるよ」と言って大人をびっくりさせる子どももいます。

○　第３段階（移行期のどもり）

吃っている自分のことばに驚き、吃っていることを意識するだけでなく、強いフラストレーションを感じるようになります。吃る回数も力んでつっかえる程度もひどくなります。そのような状態でもなんとか話そうとする工夫をします。顔をしかめたり、手を振ったりする行動（随伴運動）が現われ始め、見る人に奇異な感じを与えます。

小学校3・4年の頃
どもりを意識する

○　第４段階（２次性のどもり）

この段階になると、今まで吃ることで嫌な体験を重ねてきていますので、特定の語（例えば、自分の名前）、特定の場面（例えば、学校の朗読の時間）、特定の人（目上の人や吃ると不快な顔をする人）などに対して、話すことを恐れるようになります。できるだけ話すことを避けようとする態度も現われます。吃るまいとするあまり、かえってどもりを意識してしまい、ますます言いにくくなるという悪循環に入ってしまうのです。随伴運動も依然として続きます。

このような段階まできますと、その子どもの行動の仕方やパーソナリティに影響が現われてきます。

しかし、４つの段階を説明したヴァン・ライパー自身は、『実際には、このように進展していく子もいれば、吃り始めから自分のことばを意識している子や、決して２次性のどもりの段階にならない子もいます。また、ひとりの子どもがある日には移行期の段階になり、そして１ヵ月後には１次性のどもりの状態になる場合もあります。また、極端な例として、一日のうちにどもりの全段階を通り抜けることもあるのです』と、どもりの複雑さを語り、進展の段階を説明することの難しさを述べています。

これまでの説明をわかりやすくするために具体的に学年別に見てみましょう。

一般には、小学校１年・２年の時期は、吃るために元気がなくなったり話さなくなったりすることは少ないようです。周囲が気にしていても、本人は平気で吃っているものです。これは第１・第２段階にあたるでしょう。

成人吃音者に、どもりを意識し、悩み始めたのはいつ頃からかという質問をしますと、ほとんどの場合、小学校の中学年（３・４年）をあげます。順番に朗読をさせられて苦しかったこと、順番を外されて悔しかったこと、友だちにからかわれたことなどが、中学年からつらい思い出となっているようです。

この頃になると、ことばに関して、他人と自分とは違うという孤立感が強まり、話すことをしない、おとなしい子に段々となっていきます。第３・第４段階に入ってきたと言えましょう。学童期のどもりの特徴として、進展する時期だとお話しましたが、第１・第２段階から、第３・第４段階へと移るのは、小学校中学年の時期が多いようです。

Ｎ君の場合は、１・２年の頃から、すでに吃ることを意識し、できるだけ話さないでおこうとしている状態、つまり第３・第４の段階に入っていたと言えるでしょう。

ひとりひとりの問題の違い

もうひとつの学童期のどもりの特徴としてどもりの子どもひとりひとりの問題がかなり違っていることがあげられます。

どもりの症状は目立つけれど、明るく友だちも多く元気な子どもがいます。一方、どもりの症状はさほど目立たないのに、消極的で自らほとんど話さない子どもがいます。つまり、どもりの症状の程度と、それを気にする程度は必ずしも一致しないのです。また、日によって症状が重くなったり軽くなったりもしますし、気にする程度も変化します。友だちと話す時は吃らず、発表や朗読の時によく吃る子、その逆もあります。

それらは、その子どもの持つパーソナリティ、友人関係、教師との関係、家庭環境などに微妙に影響されているのです。

どもりの特徴として、話さえしなければ、その子がどもりであることが分からないということがあります。吃ることを意識するにつれ、どもりを避け、先生や友だちからこれを隠そうとします。Ｎ君の場合のように、「無口な子」「消極的な子」「できない子」として、ことばの問題を見逃してしまう場合もあるのです。

ことばの教室と民間矯正所との違い

Ｎ君が参加した講習会

Ｎ君が３年生の夏、民間矯正所の講習会に３日間参加し、かえって問題を大きくしたことについて少しお話してみましょう。

ことばの教室が日本にまだ設置されていなかった頃、また少なかった頃、民間矯正所の講習会で指導を受けた児童はかなりいました。全国各地に、ことばの教室が設置された現在でも、その講習会の案内が学校を通して吃音児及びその両親に紹介されているのを知り、驚きました。

Ｎ君が参加した３年生の頃は、どもりの進展のところでお話しましたように、吃っている自分を意識し始める時期にきています。その時期に、「どもりは努力次第、注意次第で治る」とし、吃るたびに注意され、ゆっくり呼吸を整えて話すなど、“吃らずに話す”練習を強制されたのでは、話すということは何と

つらい難しいことなのだという気持ちを起こさせるだけです。かえってどもりを強く意識させ、陰気な何事にも自信の持てない子どもへとN君を追いこんでいったのではないでしょうか。

ことばの教室

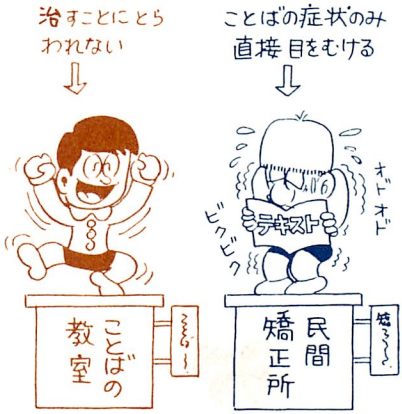
ことばの教室も、20年前に設置された当初は、「言語治療教室」として出発していることでもお分かりのように、“どもりを治す”ことを目標にしていました。かといって、民間矯正所のように、ことばの症状のみに直接目を向けていたわけではありません。子どもの持っている問題全体を把握し、どもり以外の面を伸ばしていくことによって、どもりを間接的に治していこうと考えていたのです。そのようにして確かに治っていく子もありましたが、どうしても治らない子もいました。

ここ数年、治っていない事例がことばの教室から出されるようになりました。追跡調査の結果、治ったと思ってことばの教室を修了させた子が、3年後に再発(再び吃り始める)したとか、別の教室では7年間の実践の中で治った事例は少なかったなどが、研究会で発表されるようになり、治っていない場合が、かなりあることが明らかになってきたのです。

一方、どもりが治る、治らないにかかわらず、消極的だった子が明るく積極的になったなどの実践報告が、多くのことばの教室から出されました。

私たちはこれまで、どもりが治らなければまた改善されなければ、どもりの問題解決にはならないのではないかと考えていました。しかし、吃りながらもそれに負けることなく明るい元気な子に育つなら、そのことがその子の人生にとって本質的に大切なのではないかと考えるようになりました。その子どものどもりの症状そのものを治すということにとらわれなくなってきたのです。

N君が参加した講習会と、ことばの教室のどもりについての考え方や子どもに対する指導の違いはお分かりいただけたと思います。



学童期のどもりの取り組み
ーN君の事例を通してー

仲間を作る

『N君は友だちもなく、いつもひとりでいる子でした。……略……ひどく吃る時には、「N君、はよ言えよ」とクラスの子どもたちが催足することもありました』ー担任よりー

N君のことで気になりますのは、いつもひとりぼっちでいることです。成人吃音者で、小中学校時代、どもりの影響をあまり受けず楽しい学校生活を送ったという人は、例外なく友だちに恵まれたと言います。吃る子にとって、吃っている自分を受け入れ、認めてくれる友人の存在は、とても大きなものです。

吃音児を友だちはどう見ているか

大阪府下の小・中学生（7,000名）に、吃

る友だちのことをどう思うかという調査をした先生がいます。結果は次のような声が多かったそうです。

◎気のどく、みじめ　◎からかったりばかにしたりしてはいけない　◎早く治ったらいい、治してあげたい　◎治そうと努力しているのを見て感動した　◎何かしてあげられないか　◎治す学校を作れ　◎いやだ、不愉快　◎うつりそうな気がする　◎病気だから仕方がない　◎おもしろい、愉快だ、ばかみたい　◎努力して治すべきだ

「この結果は、吃音児にとって大変希望的なものである反面、苦しい状況であることを示している。無関心な友だち、積極的に吃音者の立場に立って良き友だちとなるよう努力している友だち、吃音児の努力も考えないで足を引っぱっている友だち、と三者三様である。しかし、10人の友だちや、吃音児自身の努力の成果も、ただ１人の友だちのために無駄になることもあると考えた時、われわれは次に必ず打つ手を見出さなければならない」と調査者は考察しています。

からかいの問題

Ｎ君が吃った時、「はよ言え」とクラスの子どもから、先生のいる前ですら言われていることを考えれば、遊びの時間などでからかわれたり、いじめられたりしているであろうことは予想がつきます。

担任の先生としては、さりげなくクラスの雰囲気を観察し、状況をつかむ必要があります。なぜなら、自分がいじめられていると報告する子どもはそれほど多くないからです。からかいなどの友だちの態度がＮ君にとって大きな問題となっていると判断した時は、学級会で取り上げてもよいでしょうし、道徳の授業でも取り上げられるでしょう。その時、先生とＮ君との信頼関係がまずついていることが大切ですし、Ｎ君の承諾も必要でしょう。

ここで大阪のある小学校の３年生の道徳の授業で、どもりの問題を取り上げた実践例をご紹介しましょう。

小学３年生の道徳の授業

Ｔ（先生）Ｓ（児童）Ａ（吃音児）

Ｔ：今日はＡ君のことでみんなに話があります。……この前の金曜日、Ａ君が日直だった時、朝のあいさつの号令をかけようとしましたね。「起立!!」ってすぐに声が出ましたか。

Ｓ：Ａ君、「きききき……」って言ってたよ。

Ｔ：そうでしたね。Ａ君がそう言った時、みんなはどうしましたか。

Ｓ：笑った。

Ｓ：「早く言えよ」と言った。

Ｓ：まねをして「きききき……」と言った人がいた。

Ｔ：その時、Ａ君はどんな気持ちだったと思いますか。

Ｓ：（口々に）悔しい。嫌だ。うまく言いたい。泣きたい。

Ｔ：ここにＡ君の書いた作文があります。Ａ君に読んでもらいますよ。

A：（吃りながら読み始める）僕は3才の頃からことばがつまるようになったそうです。お母さんは心配してあちこちの病院に連れて行ってくれましたが、治りません。うまく話せるように、誰もいない所で練習しましたが、友だちと話そうとするとうまく話せません。僕はうまく話せないのが嫌です。でももっと嫌なのは、みんなが僕のまねをしたり、笑ったり、からかったりすることです。

お母さんに言うと、「気にしたらだめよ」と言います。でも僕はみんなが僕のまねをしてばかにしていると思います。僕はみんなが遊んでいる時、「仲間に入れて」と言いたいけれど、「うつる」と言われるかもしれないので黙っています。

T：みんな、A君のこと分かっていると言うけど、本当にそうかな。

S：A君とは幼稚園の時から友だちだけど、今はあまり遊ばなくなりました。A君はすぐしょんぼりしておもしろくないんです。

S：A君はかわいそうです。みんながからかうのは悪いことだと思います。

S：僕はこの前、A君をからかった。A君を見てると自然とからかってしまうんだ。

S：僕らがA君をばかにしているなんて思わんといてほしい。これから一緒に遊ぼうよ。A君もよせてと言えばいい。

（中略）

T：もし、自分がA君でしゃべれない時、からかわれたらどんな気持ちがするだろうか。

S：（口々に）さびしい。腹が立つ、からかったやつをなぐりたい。死にたい。

T：あのね、A君のしゃべり方がうつると思う人、手を上げて下さい。

（何人か手を上げる）

先生はいろいろと調べてみました。A君のようなしゃべり方をする人は、100人に1人はいるんです。それでもうつることはないんです。……（どもりについて話す）、A君の気持ちが分かってきているみんなは、これからA君に何ができますか。またA君はみんなにどうすることができるでしょう。おたがいに手紙を書いてごらん。次の時間にそれをもとにして話し合いましょう。

この授業の場合は成功でした。しかし、仮に学級会や授業が先生の意図通りには運ばなくても、先生の意図を少なからずくみ取る子はいるでしょう。先生は自分の味方だし、自分を受け入れてくれる仲間が少なからずいるという事実は、どもりの子に大きな勇気を与えるでしょう。またこれまで隠し続けていたことをクラスのみんなの前で公表したということは、自分の立場が明らかになったという安心感を与えましょう。

このような取り組みにもかかわらず、今まで通りいじめられることはあるでしょう。その時、吃音児が今までとは違った態度がとれれば、からかいの問題は解決に近づいたと言えましょう。

N君の仲間作りについては、先生のクラスの実情に合わせて、ねばり強く、先生自身の学級経営の方針に添ってお取り組みいただけたらと思います。

消極的な行動を変える

『N君は消極的で自らは決して手を上げません。私が意図的に指名しても立っているだけで反応しないのです』　― 担任より ―

先生は、このようなN君の消極的な態度は解決しなければと考えられたのですね。

たとえ、N君が吃っていても、クラスの中で元気で明るく発表もし、どもりを気にせず生活していたら、先生は私たちことばの教室に相談に来られることはなかったのではないでしょうか。

どもりの問題は、吃る、吃らないにあるのではなく、どもりが影響して、行動全体、パーソナリティまで規定してくることにあります。

N君の段階にまでどもりが進展しますと、吃ることに対する恐れや恥ずかしさから、自分のしたいことや、しなければならないことでも吃るからといって逃げてしまいます。

成人吃音者の持つ問題もそこにあります。成人吃音者がそのような生活から脱け出そうとしても小学校時代から築き上げられてきた逃げの姿勢は容易にくずれません。ですからN君のように、そのような傾向は見られるとは言え、大人のようには逃げの姿勢が固まっていないうちに、その姿勢から脱皮させることが大切なのです。

行動を把握する

どれだけどもりを意識し、そのためにどのような行動をとっているのかをつかむことが大切です。

役割や課題が与えられた時、発表や朗読の時、N君がどのような態度をとるか、日常の生活の中で観察して下さい。先生から自然に発表の場に追いこむ、つまり場面設定（課題を与える）をし、その時にとる行動をみることもできましょう。

話し合い

行動が把握できたら、その行動について子どもと話し合うことができましょう。N君がその話し合いに応じるかどうかは、その相手が、○自分がどもりで困っていることを知っている　○どもりについて知識がある　○具体的にどうするかを知っている　ということが決めてになりましょう。

この相談相手を、これまではことばの教室が担ってきましたが、上の条件を満たした担任の先生であれば、その相手になっていただくことは可能です。

役割を与えられた時の気持ち、役割を果たすためにした努力、実際とった行動、その後の気持ちなどについて話し合い、どもりであればできなかったことなのか、と話を進め、吃りながらでもその役割は果たせることを理解させていきます。

そして、自信のあることを吃りながらもでき、更にはにがてな場面でも逃げずに課題を果たす子へと指導して下さい。その時、どのような役割を与えたらよいかは、先生のクラスの実情に合わせて下さい。私たちことばの教室と相談することもできましょう。とにかく、これまで逃げてきた行動を少しずつでも逃げないよう変えていくことが大切なのです。

特に、朗読、発表の場面について

日常とった行動について話し合いができるようになれば、国語の朗読の時間どうすればよいのか、自分で選択させることができます。順番にあてた方が良いのか、急にあてた方が良いのか、当面は免除した方が良いのか、その時、先生がN君のことばの状態を知っており、一般に吃音者は朗読や発表についてどう思っているのか知っていれば、より良い解決方法がみつかるだろうと思います。

ご参考までに、成人吃音者の声をご紹介しましょう。

○　順番に指名されると、番が回ってくるまでがつらくて苦しいから急にあててもらった方が良い。

○　朗読を免除されるのは、その時はほっと安心するけれど、その後はみじめな気持ちになる。

○　吃っている時より、その後の遊び時間皆が注目しているようでつらい。

○　先生が最初の一語、一文を一緒に読んでくれると読みやすい。

○　みんなと一斉に読むと吃ることが少ない。

○　いくら吃っても指名してほしい。

○　オーバーヘッドを使って発表した社会の時間が楽しかった。

○　算数の時間、黒板に問題を解きながら説明することは好きだった。

以上、子どものことばの問題を把握しながらも、特別扱いしないで、他の子どもと同じように役割を与え、発表させたりすることが、逃げない姿勢を作ることになりましょう。

自信を持たせる

『どもりを治すのは、努力と注意やと言われました。「また!! 言い直し!! また!!」とそれは口やかましく言ってきたのです。そしたらものを言わん子になってしまいました。それ以後、なんか暗い陰気な子になってしまいました』　　— 母親より —

どもりを受け入れる

どもりが受け入れられていない状態の中で、N君は吃るかもしれないという不安を持ち、吃ることを恐れ、話をしない陰気な子どもになっていったのですね。周囲がどもりを受け入れているかいないかは、どもりの子どもに大きな影響を与えます。『吃っても最後まで話を聞いてくれる』『吃ってもあまり緊張しない』、これは、ことばの教室に来るのが楽しいという子ども達の声です。吃っているそのままを受け入れてくれる人を子どもは求め

ているのです。

どもりを周囲が受け入れることに関して、母親へはことばの教室からお話しましょう。クラスの子ども達には、担任の先生にお願いしなければなりません。からかいの問題の時のようにクラス全体の中で考えていただければと思います。現実の社会の中で、様々な障害を持ちながら、それにくじけることなく精一杯生きている人の話をし、そのことについて子どもと話し合うことができましょう。新聞や雑誌の中で生きた教材はあるものです。

それらの話し合いの中で、N君には、自分がどもりを受け入れることの大切さが、またクラス全体には、すべての人々の個性を尊重し、人格を認めることの大切さが分かっていくのではないでしょうか。

自信を持たせる

何事に対しても自信が持てずにいるN君に、自信をつけさせる必要があります。N君の得意な面、プラスの面に目を向け、それを伸ばすことが大切です。特意な科目には、黒板やO.H.Pなどを使って発表させることができます。協同学習も有効です。体育や音楽では、吃る子どもも、それを意識しないで実力が発揮できます。水泳、鉄棒がうまい。走るのが速い。野球がうまい。これらのことは仲間が、その子を受け入れる要素ともなり、自信を持つことができます。歌が好きであれば、コーラス部に入れるのもよいでしょう。休み時間などにみんなの歌声が流れれば、好きな子どもには励みになりますし、不得手な子どもには、好きになるきっかけにもなりましょう。体育や音楽が、子どもを仲間の中に入れ、自信をつけさせたという実例はたくさんあります。

その他、教科の面で、クラブ活動で、クラスのいろいろな役割の中で、N君が自信が持つことができることを、お考えいただければと思います。

コミュニケーションの問題

母親が心配し、周囲の子ども達も気になっているN君の話しことばについて次に考えてみましょう。

私たちの教室では、吃る子どもに対して、どもりそのものを治す目的ではなく、それに負けない明るい子どもに育てる為に、コミュニケーション能力全体のレベルを上げることを考えます。

うつむきかげんで、ボソボソとしか話さない子どもには、元気のある声を作る為に、歌を元気よく歌ったり、詩吟を練習したりします。又表現力をつける為に、演劇をしたり、詩の朗読をしたりします。パントマイムなどの練習をし、体全体で表現することを学びます。日記や、作文を書いて考えをまとめることも大切にします。これらのことで、吃ってもどんどん話す子どもに育てていくのです。

吃って失敗し、吃ることに恐れをいだいている子どもにはこれらのことが必要になってくるのです。ことばの教室だけでなく、学級の中でも以上のことはできましょう。国語の時間や音楽の時間などがその為に使えるのではないでしょうか。

お わ り に

N君の問題を中心に、学童期のどもりについて考えてきました。日頃努力されている先生にお願いばかりが多かったように思います。それだけ、普通学級の先生の役割が、どもりの子どもにとって大きいということなのでしょう。今後、連絡を取り合いながらN君の問題を考えていきましょう。担任の先生におやりいただくこと、私たちの方がやりやすいことなどが更に明らかになってきましょう。

「自分の悩みを聞いてくれる先生や仲間が欲しかった」という成人吃音者の切実な声をお伝えして、この手紙を終ります。

成人吃音者へ

お手紙拝見致しました。

長い間、ご自分のどもりのことで悩んでこられたAさん。幼い頃にはご両親から、学校に入ってからは先生やお友だちから、更には書物の中などから教えられて、様々などもりを治す方法を試みてこられたそうですね。3回も民間矯正所へ行っても治らず、“自分のどもりは治らないのではないか”とさえ考え、もうこれで最後にしたいと思われたお気持ち、私たちも同様の経験をしてきた者として同感できます。

あなたのお手紙を拝見しておりますと、私たちに思い当たることばかりです。同じようなところで悩み、つまづき、苦しみを味わいながら、どもりという森の中に迷いこみ、あてのない道をぐるぐる回ってきたものだと、今さらながらに感じます。あなたがもうどもりの話はうんざりだと思われるのも無理からぬことでしょう。

それにしてもなぜ、これほどまでに多くの吃音者が、同じようにどもりという得体の知れない森の中でさまよい続けているのでしょう。

結局は、それぞれの吃音者がたった1人でさまよっているからではないでしょうか。1人だから、たとえその人が苦しんだあげく森を抜け出す道を発見したとしても、その道標を後に続く人々に示すことができなかったのではないでしょうか。

あなたと、今こうして返事を書いている私たちと、大きく違う点が1つあります。それは、同じ森に迷いこみながらも、私たちには大勢の仲間がいて、仲間と共に手探りをしながら、あっちの道、こっちの道をたどってみて、知恵を出し合い、何とか森を抜ける道を探そうとしたことでしょう。

とっぷりと日が暮れて道が分からない、行けども行けども同じような道を1人で歩いていたとしたら、それはとても耐えられないことでしょう。あなたが悲観的になるのも当然のことと思います。

この森とは何なのか、なぜ道に迷ったのか今一度振り返ってみましょう。これから森に迷いこんでくるかも知れない後輩のためにもそして私たち自身のためにも、道標をつけることは大切なことです。

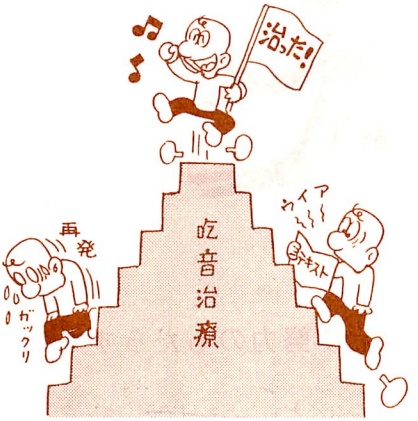
どうしてどもりを治そうとするのか

私たちはどもりを治したいと常に考えてきました。どもりが治らないと幸せになれないとさえ思いつめてきたのです。

成人には民間矯正所があり、子どもには、

ここ10数年来、言語治療教室（ことばの教室）が設置され、どもりを治す努力が続けられていました。

吃音者やまわりの人々は、なぜどもりを治そうとしたのか、まずここから考えてみましょう。



私たち吃音者は、幼い頃からどもりにまつわる随分嫌な体験を積み重ねてきました。子どもの頃、吃るたびに見るあの母親の悲しい顔、「あの子と遊ぶとどもりがうつる」と言われ、仲間はずれにされた悲しさ、学校に入ってからは国語の時間などで朗読を指名され一言も声が出ずに席についたことや吃るのが嫌さに分かっている答も「わかりません」と答えた無念さ、「どもり」とからかわれた悔しさは、吃音者なら誰でも思い出すことができるでしょう。

そんな毎日を過ごすうちに、気がついてみると友だちからも離れ、勉強も手につかない無口で消極的な子どもになっていました。

社会に出てからは、職場の上司への報告や得意先への電話でよく失敗し、だんだんと仕事がおもしろくなくなっていきました。

一方、どもりについての社会一般のイメージも、「神経質、小心、あわてもの」など、決して良いものではありません。就職の時の面接試験で落とされたり、結婚の時吃るというだけで反対されたという話も聞きました。

このような状況の中で、私たち吃音者が、「どもりさえ治れば……」とどもりが治ることを夢み、またまわりの人々がなんとか治してあげたいと願うのも無理からぬことと言えましょう。

ここに、どもりの森への入口があるのです。

どもりは治っていない

明治36年、東京の小石川に日本で初めて民間矯正所ができ、どもりに悩む人々が大勢つめかけました。その後、類似の矯正所が全国に広がり、「どもりは治る」とこぞって宣伝し始めました。そして、それはどもりを治したいという吃音者や親の切実な願いと結びついて、「どもりは治すべきもの、治るもの」という前提がいつしかできあがってしまったのです。

以来70数年、その前提のもとにいろいろな治療法が考え出され、取り組みがなされてきたのですが、果たしてどもりは治っているのでしょうか。本当に吃音児・者の悩みは解決されたのでしょうか。

民間矯正所の終了者について、私たちはかつて実態調査をしたことがあります。その結果は、「一時的によくなった人も中にはいたものの、すぐ元の状態に戻っており、結局はほとんどの人が治っていない」というものでした。あなたや私たちもその例外ではありません。

また、子どものどもりなら治しやすいから今のうちに治しておこうと出発したはずの「ことばの教室」においても、完全に治ったという報告は多くないのです。そして、どもりを治す（吃症状の除去）ことにこだわらず、

吃りながらもそれをハンディキャップにしない子どもに育てることを吃音児指導の最終目標とすることばの教室が次第に増えています。

日本より早くからどもりの組織的な研究が進み、どもりに関わる専門家も多いアメリカの現状はどうなっているのでしょう。

アメリカの著名な言語病理学者で、自分自身も吃音者であるチャールズ・ヴァン・ライパーは、手紙で次のように私たちに知らせてくれました。

『成人になってもなおひどく吃っている吃音者は、世界中のどんな方法を使ってもほとんど治ることがないと、私は確信しています。

遠い昔からあるどもりの問題を、私は長年研究してきました。自分のどもりはもちろんのこと、何千人もの吃音者を診てきました。報道機関を通じて様々などもりの治療方法が公表されるたびに、そのうちのひとつくらいは本物があるだろうと期待して、その検討もしてきました。

しかし、それらはいつも子どもだましであったり、その結果の確認が不正確であったりしたのです。

このような状況の中から、私たち吃音者はおそらく一生吃って過ごさなくてはならないであろうという事実を認める必要が生じてきました。

ぜんそくや心臓病をわずらっている人が、その治療が難しいという事実を受け入れているのと同様に、私たちもその事実を恥ずかしがらずに受け入れようでありませんか』

「どもりは治る」という前提を、私たちは今考え直さなければならない時期に来ているようです。

このことが、あなたと確認しておきたかった第１点です。

森の様子が少し分かりかけてきたのではないでしょうか。

治す努力のもたらすもの

「少なくとも、どもりで困り悩んでいる人が治ると信じ、そのための努力をすることは悪いはずがない」という一見もっともな考え方とその行動がもたらす影響を、次に考えてみましょう。

どもりを治そうと努力し、どもりが治ってしまえば問題はありません。ここで問題としたいのは「どもりは治すべきもの、治るもの」という前提で治す試みをして治らなかった時のことです。

どもりを治したいと願い、治そうと努力して治らなかった場合、私たち吃音者は「治らないのは自分の努力が足りないせいだ。精神力が弱いからだ」と自分自身を責め、もっと努力すれば治るはずだと考え、自分への不信をつのらせます。

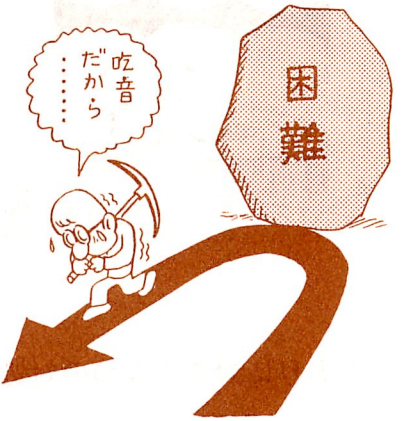
また一時的にもなめらかに話せたことは、ますますどもりが治ることへの憧れを大きくさせます。どもりに悩む吃音者が何回となく

矯正所を訪れるのもそのせいでしょう。3～4週間、矯正所に寝泊りしながらどもりを治す努力を続けます。治ったかのように見えて終了してもすぐ元の状態に戻り、終了後2ヵ月でまた入所というように、4回5回と矯正所通いを繰り返す吃音者も少なくありません。1回につき3～4週間ですから、それに費やす時間的、金銭的エネルギーは莫大なものになってきましょう。

更に、どもりを治そうと思えば思うほど、また治そうと努力すればするほど、「どもりは悪いもの、劣ったもの」というどもりに対する否定的な感情が強まり、どもりへの悩みはますます深まっていくということになりかねないのです。そして、吃っている現実の自分を受け入れることができなくなり、「どもりだから ～ できない」、「どもりが治れば ～ しよう」と日常の生活が消極的になっていく吃音者は少なくなかったのです。

以上のことから、どもりを治そうと思い、またそのために努力することがかえってどもりの問題をこじらせてきたということがご理解いただけたと思います。これが確認しておきたい第2点です。

『何かしなければならないことでも困難を感じると口実を作って逃げ、それでも自分はどもりだから仕方がないと思いこもうとしてきたことが恥ずかしい。責任逃れをしながらついついそうして自分に甘えてきた。ひょっとすると今まで私は、どもりそのもので苦しみ悩むより、どもりを言い訳にして意に反する行為をしてきたことに対して思い悩んできたことの方がはるかに多かったかもしれない。でもそこから一歩も踏み出せないまま、その悪循環の中にどっぷりと浸っていた。どもりについて本当に真剣に考えてこなかった気がする』



どもりの本当の問題は何か

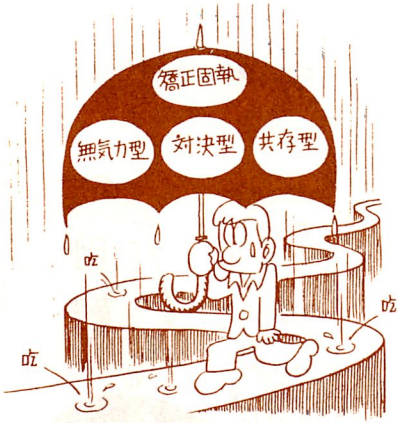
私たちはどもりであることを他人に知られたくありません。また、たとえ知られたとしても、吃っている姿を他人の前にさらしたくないのです。

だから、吃らないようことばを選んで話したり、話さなければならない場にはできるだけ出かけないようにします。また、言いやすいことばを捜すあまり、「話」そのものの内容さえも変え、相手から誤解されたり、そのことで相手を傷つけたとしても、吃って恥をかくよりはましだという吃音者もいました。

これはある吃音者の体験ですが、このように消極的な生活を続けていると、自分の人生にとって大きな課題に直面した時、とても自分には乗り越えられないと考え、それを前にしてぶつかろうとさえしないですぐUターンしてしまうこともあります。この大きな課題とは、ある人にとっては就職試験の際の面接試験であり、またある人にとっては仕事に関しての研究発表などがそれにあたりましょう。

面接試験の当日、病気だといって休み、以後試験を受けられなかったという人もいます。

これまでの私たちの生活ぶりを振り返ってみました。どもりの本当の問題とは、吃るか吃らないかではなく、そのために自分のしたいことができない、つまり自由な行動がとれない、いやとらないことであり、それをどもりのせいだと考えていることです。このことを確認の第３点としましょう。



どもりに対する４つの対処

これまであなたと次の３点について確認してきました。

① 「どもりは治すべきもの、治るもの」という前提の中で、努力をしても治っていない人が多いという事実。
② 治そうと考え、また治そうとすることで起こってくるマイナス面が大きいということ。
③ どもりの問題は、吃るか吃らないかではなく、自由な行動がとれないことをどもりのせいだと考えていること。

これら３点の確認ができた上で、次に、これまで多くの吃音者がとってきたどもりに対する対処の仕方をご紹介しましょう。

そこに、これから私たちの歩む道、森を抜ける道が見出せるでしょう。

(1) どもりそのものにこだわりを持ち、どもりから逃れるために、なんとかどもりを治そうとします。民間矯正所、病院、あるいは断食道場と、どもりが治ると聞けば訪れます。自らどもりを治すというより、治してくれる所を求めているのです。いわば、矯正固執・依存型と言えましょう。友だちや恋人ができない、仕事が楽しくないなどと、日常生活の不満をどもりのせいにしてしまいます。

(2) どもりに対してはこだわりを持ち、何とか治したいと願いながら、これまでの治療の失敗の経験からか、治そうという意欲はあまりありません。しかし、吃りたくない気持ちは強く、できるだけ人前に出ないでおこうとします。また、吃らないようことばを選んで話すため、自分の意志に反した発言をしたりして、自己嫌悪に陥りますが、どもりだから仕方がないと思い、消極的な生活を続けているのです。無気力型と言えましょう。

(3) どもりそのものにはこだわりを持たないが、少しでも改善ができるのならと独自で朗読の練習や発声練習をしたり、サークルで活動するなど、進んで人前に出ようとします。いわゆるどもりとの対決型です。結婚式の司会を進んで引きうけたりして、積極的に吃りながらも行動します。

(4) どもりそのものにこだわらなくなり、それと対決していこうというよりは、む

しろ、吃っている現在の自分をそのまま素直に認めています。どもりを治す努力をするよりも自分なりの人生を歩もうとします。いわば、共存型と言えましょう。

もちろん、この4つに大別できないどもりに対する対処の仕方もたくさんあります。1人1人のそれまで生きてきた人生、吃り方、人生観が違うのですから、どもりを十把一からげにできないのは当然ですが、実際このような人たちに多く会ってきましたので、あえて大まかに4つに分けてみました。

実は、(4)のような生き方を私たちはこれまで知りませんでした。どもりで悩み、どもりが頭から離れることのなかった私たちにとって、どもりを素直に認めることなど思いもかけないことでした。吃音者であれば、どもりにこだわるのが当然だし、(1)のタイプや(2)のタイプが多いであろうと信じてきたのです。

どもりに悩む人たちの声は、民間の矯正所やことばの教室に届きます。しかし、吃りながらもそれに負けることなく明るく生きる人の姿は、これまでほとんど私たちの目の前に現われることはありませんでした。たとえいても、著名な政治家であったり、芸術家であったり、学者であったりして、「どもりでもあのように生きられる」と言われても、私たちにとって雲の上の存在であり、ピンとこなかったのです。

吃音相談会を企画し、全国を回った時に、いたる所で、吃りながら明るく生きている人の話を聞きましたし、またそのような人たちに直接会ってもきました。そのような人たちが予想外に多かったということは、私たちに大きな勇気を与えました。というのは、私たちも言友会という成人吃音者のサークルの中で、大勢の吃音者と自分たちのどもりについて語り、吃りながらも行動していくうちに、治らなくてもそれをハンディキャップと考えないで生きる人が大勢育ち、そのことを評価し、今後の私たちの進むべき方向にしようという確信を持ち始めていた時期だったからです。こうありたいという生きた見本がたくさんいることに勇気づけられたのです。

お わ り に

あなたと私たちのこれまでの道を整理する作業は終わりました。

どもりという森の中にさまよいこんだ私たちに多くのどもりの先輩たちが、「あなたは気づかなかったけれど、こんな道もあるのですよ」と教えてくれています。(3)や(4)のタイプのようなどもりに対する対処の仕方はプラスの方向と言えましょう。

どの道を歩むか、これは自分自身が決めることでしょう。自分の足で、自分の力で歩まなければなりません。

あなたと同じように森に、迷いこんだ私たちは、大勢の仲間と共にどもりを治そうとするよりも気楽に吃ることを考え、吃りながらもそれに負けることなく、自分なりの人生を

歩もうと、今、その道に足を踏み出そうとしているところです。

私たちと一緒に歩きませんか。今度は１人でなく大勢の仲間がいます。疲れたら一緒に休みましょう。困った時はお互いに助け合いましょう。１人で歩くより、仲間がいることはどんなに心強いことでしょう。

私たちより前にこの道を歩んだ人たちが、この道を歩むにあたって心構えや注意事項を私たちに示してくれました。アメリカの言語病理学者がいます。一国の首相がいます。名もない工場労働者がいます。予想できないかもしれませんが、電話の交換手さんがいます。それらの人々が示してくれたガイドを手に、もう一度、私たちの可能性に挑戦してみましょう。あせらずに、マイペースでいいのです。

ガ　イ　ド

＊誰でもよい、どもりについて誰かに話すことはよい。

＊どもりは治らないかも知れない。しかし、ハンディキャップを背負っていない吃音者になることはできる。

＊どもりを、おおっぴらにすると周囲の人が楽になる。そして自分も楽になれる。

＊どもりを治す努力はしなかったが、仕事に関する勉強は人一倍した。

＊いつも地味で目立たない服装をしていないで、時には陽気でハデな服を着てみよう。それだけでも気分がかなり違ってくる。

＊「君は話すことばかり一生懸命で、相手の話を聞かないね」と友だちに言われた。

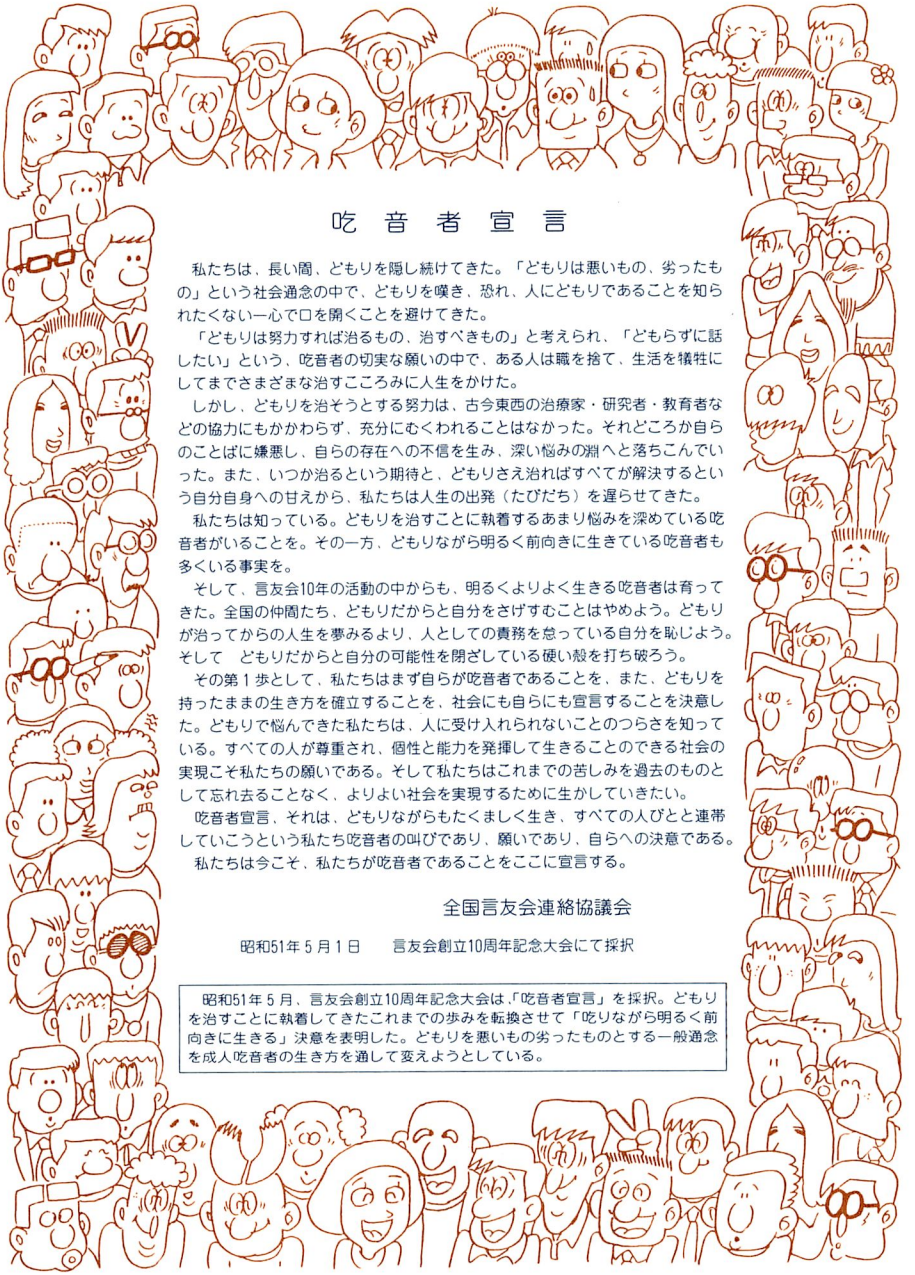
＊吃れ、吃ってもよい。だが、この次はほんの少しでよいから、さっきよりうまく恰好よく吃ってみよう。

＊どもりを治したい、と本人が思いつめるなら、徹底的にそれに打ち込もう。しかし、そのことにのみ費やす努力は６ヶ月以内と期限をつけた方がよい。

＊ボランティア活動を通して、様々な障害を持つ人々とつき合い、自分の人生を考え直すことができた。

＊自分には自分のやり方がある。マイペースでぼちぼち行こうと決めたら、気が楽になった。

＊聞き上手。ユーモアのセンス。笑顔。豊かな表情。これらが吃りながらも楽しいコミュニケーションを作る。



吃　音　者　宣　言

私たちは、長い間、どもりを隠し続けてきた。「どもりは悪いもの、劣ったもの」という社会通念の中で、どもりを嘆き、恐れ、人にどもりであることを知られたくない一心で口を開くことを避けてきた。

「どもりは努力すれば治るもの、治すべきもの」と考えられ、「どもらずに話したい」という、吃音者の切実な願いの中で、ある人は職を捨て、生活を犠牲にしてまでさまざまな治すこころみに人生をかけた。

しかし、どもりを治そうとする努力は、古今東西の治療家・研究者・教育者などの協力にもかかわらず、充分にむくわれることはなかった。それどころか自らのことばに嫌悪し、自らの存在への不信を生み、深い悩みの淵へと落ちこんでいった。また、いつか治るという期待と、どもりさえ治ればすべてが解決するという自分自身への甘えから、私たちは人生の出発（たびだち）を遅らせてきた。

私たちは知っている。どもりを治すことに執着するあまり悩みを深めている吃音者がいることを。その一方、どもりながら明るく前向きに生きている吃音者も多くいる事実を。

そして、言友会10年の活動の中からも、明るくよりよく生きる吃音者は育ってきた。全国の仲間たち、どもりだからと自分をさげすむことはやめよう。どもりが治ってからの人生を夢みるより、人としての責務を怠っている自分を恥じよう。そして　どもりだからと自分の可能性を閉ざしている硬い殻を打ち破ろう。

その第１歩として、私たちはまず自らが吃音者であることを、また、どもりを持ったままの生き方を確立することを、社会にも自らにも宣言することを決意した。どもりで悩んできた私たちは、人に受け入れられないことのつらさを知っている。すべての人が尊重され、個性と能力を発揮して生きることのできる社会の実現こそ私たちの願いである。そして私たちはこれまでの苦しみを過去のものとして忘れ去ることなく、よりよい社会を実現するために生かしていきたい。

吃音者宣言、それは、どもりながらもたくましく生き、すべての人びとと連帯していこうという私たち吃音者の叫びであり、願いであり、自らへの決意である。

私たちは今こそ、私たちが吃音者であることをここに宣言する。

全国言友会連絡協議会

昭和51年５月１日　　言友会創立10周年記念大会にて採択

昭和51年５月、言友会創立10周年記念大会は、「吃音者宣言」を採択。どもりを治すことに執着してきたこれまでの歩みを転換させて「吃りながら明るく前向きに生きる」決意を表明した。どもりを悪いもの劣ったものとする一般通念を成人吃音者の生き方を通して変えようとしている。

お　わ　り　に

「どもりの悩みを聞いてくれる先生や友だちが欲しかった」「母親にすらどもりのことは話せなかった」

この成人吃音者の思いをパンフレット、「お母さんへの手紙」「普通学級の先生への手紙」「成人吃音者への手紙」の中にもりこみました。

かつて、どもりという得体の知れない森の中にさまよいこんだ私たちの１人、伊藤は、大学の教官として、言語障害児の教育を担当する教師を養成する仕事に携わった経験があります。また、溝口、村上は、言語障害児教育教員養成課程に学び、現在、溝口は普通学級を担任し、村上はことばの教室を担任し、それぞれの仕事の中で、どもりの子どもやお母さん方と接しています。

このパンフレットは、３人が互いの実践を出し合い、話し合って原案を作りました。そしてそれをことばの教室をはじめとする関係諸機関の担当の方々にお送りし、検討していただきました。それをもとに、監修者の内須川教授、吃音児を持つ母親、教育関係者らと数度にわたって合宿をし、何度も原案を修正しました。なお、楽しく読めるようにというご教示も多く、東京言友会の会員で、今はプロの漫画家の皆藤進（バク・ショウ）が、イラストを担当しました。文章もイラストも吃音者の手によっています。

原案を書き始めてからすでに１年がたとうとしています。不十分ながらも、やっと私たちの手から離れたというのが実感です。もとより、パンフレットは出せばよいというものではありません。どもりに対する考え方はいろいろあり、どれが良いか一概には言えません。これをもとに、お母さん方、先生方、そして成人吃音者が共に、どもりについて話し合う場ができ、改めてどもりについて考えるきっかけになればうれしい限りです。その話し合いの輪の中に私たちも入れて下さい。そして、吃音児・者にとって何が幸せにつながるのか、一緒に考えていきたいと思います。

原案をご検討下さった方々をはじめ、財政的にご援助下さった方、暖かく見守って下さった方など、多くの人々のご理解とご支援によって、このパンフレットはでき上がりました。特にあゆみの箱・安田生命社会事業団・ライオンズチャリティファンドからは貴重な財源の中から多額のご援助をいただきましたし、印刷を引き受けて下さった尚文館工房は、無理な注文にも快く応じて下さいました。その他、ご協力下さった多くの方々に、心から感謝いたします。

執筆代表　伊　藤　伸　二

1978年10月15日　発行

監　修　者	内須川　洸	筑波大学教授・心身障害学系
執　筆　者	伊　藤　伸　二	元大阪教育大学講師・大阪言友会
	溝　口　稚佳子	摂津市立別府小学校教諭・大阪言友会
	村　上　英　雄	平田町立今尾小学校教諭（ことばの教室）・岐阜言友会
イラスト	バク・ショウ	日本漫画家協会会員・東京言友会